Dhādekī-Sālhāpūr の家庭と家族

——北インド農村の社会と生活(2)——

佐々木　　明

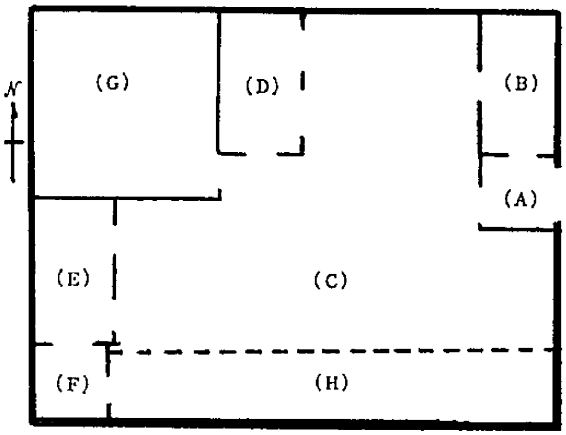
この稿では Jāṭ を中心とする Dhādekī の家庭生活を記述する。具体的情報を提示し，インド家族研究の主題である Hindū joint family 等の家族形態・構造の分析を行なう準備をするのが目的である。それゆえこの稿では，家族内の社会関係から考えられる拡大形態の限界について言及する程度にとどめる。目的が定性的記述にあるので，網羅的定量資料は不必要であり，主として扱うのは Jāṭ の家庭，家族である。前稿でみた Jāṭ の村内での政治的・経済的支配性により，Jāṭ 以外の諸 caste のもつ家庭・家族の理念は実質的には Jāṭ 家族の模倣である。最貧層 Chamār の家庭生活について言及すれば，「はさみうち法」的に中間 caste の状態も理解できるから，この稿の記述法で Dhādekī 全体の家庭生活を把握できる。

前稿（佐々木，1981 a）の概観につづき家庭・家族を扱う記述順序はやや特殊である。インド農村が特徴的共同体をなし，この共同体が補完的・互恵的関係にある諸 caste の集合で，各 caste が特徴的拡大家族の集合であるとする定説的視点から，村の概観につづき，caste 構成を世帯数によって表示し，各 caste の職能を記述するのが北インド農村の場合でも標準的である。しかし民族誌的調査の対象となった他の北インド農村と同じく，歴史的背景から土地占有権を独占する支配 caste と，これに従属する raiyā（従属身分）をなす諸 caste とからなる Dhādekī のような社会を，補完的・互恵的権利義務関係にある基本的には均質な caste 群の集合した共同体とみなすのは妥当でない。また世帯数を表示しても，caste（場合によっては世帯毎）に「世帯」の定義規模がまちまちであるのは問題である。さらに村内での経済実態，特に中間 caste の職能に関する経済項目の需給実態が不明確なのに，各 caste の職能を記述するのは caste 職業を過大評価させやすい。以上の理由から，caste に関する記述をあとにまわして，やや特殊な記述順序をとった。

なお Dhādehī の Jāṭ の家庭生活では男性の場（ghēr）と女性の場（ghar）が分かれているので，この稿ではそれぞれでの生活と社会関係を述べ，最後に既存報告も総合し北インド農村の家庭生活と家族の拡大限界について述べた。

(1)　Ghēr

Ghēr（ghērnā：囲う）は農具・飼料・家畜収容の空間であり，男性が生活時間の大半を過す空間でもある。これに対し ghar は食物・女性の空間である。8～10才以上の男性が ghēr で夜を過すのに対し，女性は一生 ghar で眠る。Ghēr は Jāṭ に限らぬ地主自作農一般の基本的財産で，ghēr 建設は持参金（古くは婚資）準備に次ぐ最重要投資項目である。Ghēr と ghar とを別置する理由は，ghar 内に収容しがたい家畜・大型農具の管理といった単純な項目にとどまらない。Jāṭ 女性が自分の家族以外に顔をみせない，つまり pardah を守る（pardah mannā）ために，女性のいる空間と来客男性・雇男の出入りする空間を分離する社



第一図：Ghēr の基本的間取り　(1/300)

会的必要があることには，特に注意すべきである。

第一図は必要最少限の ghēr の基本的間取りである。現実の間取りは敷地と道路との位置関係によって決まる。この間取りに対応する Jāṭ 家族の構成員数は5人，Chamār の常傭農業労働者1人，雄牛2・雌牛1・水牛1対からなる家畜群が対応する。総面積約 300m² で，15mと20m程度の長い壁がかこむ長方形の敷地に日乾レンガで部屋（kamrā）をつくる。東の(A) gēlrī (st. H.[1] gail：無扉の出入り口）のすぐ右手に(B) baiṭakk（<baiṭnā：座る）がある。(A)には，家畜の出入り・侵入者を発見するために一名の多くは老人，または犬が座っている。(B)は男性客用の客室兼男性の寝室（冬期）である。敷地の約半分を占めるのが家畜をつなぐ(C) sahan ((A)中庭)である。(C)の周囲に，牛車（boggī）の部屋(D)，冬期飼料の麦ワラ（bhūs）の部屋(E)，厳寒期に家畜（pasū：st. H. pashu）を入れる部屋(F)，雨期・乾暑期に牛をつなぐ(H) kuṭṭī（小屋がけ)をつくる。西北隅に後述の(G) ghar がある。(G)の出入り口と(A)は一直線上になく，(G)の内部を外から見通せない。現在の Jāṭ は gēṛh を焼成レンガでつくり，(A. B. D. E. F.）の面積は約2倍，(H)もヴェランダ風で，トラクター用車庫・道具用納屋・病畜用部屋等を設け，(C)には飼葉切り機の動力源となる paḍ (threshing pan) をおくから，大きなものは第一図の4倍の面積をもつ。

相続に際しては外壁をそのままにして，内部を分割し，それまで単一の ghar・ghēr 複合を収容した敷地を内分し，新しい ghēr の部屋及び ghar をつくって，旧いものとあわせて必要な数の複合を設ける。内部に分割壁をつくり，別々の(A)を設けると分割が終る。何年かたって各々の家族構成員数と家畜数がふえると別々の方向に壁をひろげ，部屋をつくりたす。周囲に適当な空地がない時には，相続した敷地を近親者に譲り，集落の周辺に空間を求める。その過程で，集落中心部にある ghar から離れて ghēr をつくる世帯が生じる。Ghar と ghēr の分離状態は次代になって，末子が中心部の ghar を相続し，他の兄弟達が周辺部の ghēr を相続することによって解決する[2]。前稿註(7)に記したように近世以降，集落外縁が税制上固定され，そのなかで Jāṭ は中間 caste にかこまれて居住していた。近代的人口増加が始まると，村内の富裕層でもある Jāṭ では特に増加率が高いので，かなり余裕のあった中心部の居住区も飽和状態になり，中間 caste の住居の外側の周辺地帯に ghēr をつくり，やがて ghar を設ける必要が大きくなる。一つの父系集団をなす Dhādekī の Jāṭ 内の近縁世帯間の近隣性が上記の過程を経ることにより不連続に低下する。つまり近代的人口増加は

dominant caste と中間 caste の混住による居住区の身分性を不明瞭にさせるのと同時に，近縁世帯間の特別な関係の消滅を加速する。Ghēr を手離す場合に，優先的に近親に渡す[3]ことも特別な関係の消滅を遅らせる要素ではない。

Dhādekī の Jāṭ は，共通始祖 Dhādā と父系でつながる Salār 姓[4]の世帯からなり，各世帯間に身分的優劣関係をみとめない。この原則は，一方で近縁世帯間の特別な関係を急速に消滅させると同時に，現実の農業経営規模とそれに基づく収入が父系集団内部の家系群毎の世帯増加の大小による相続土地量の偏りと Jāṭ 世帯間の耕作・経営権売買とにより著しい分化をみせるにもかかわらず，各世帯間が同一の資格で Jāṭ 社会を形成している，という強い意識を生ぜしめる。Salār 姓世帯の間の優劣関係を認めない原則は，Jāṭ 男性間の厳格な秩序と複合しているから，この原則が特に horizontol な意味を持つとみるのは妥当でない。Jāṭ 男性間では年齢秩序が明瞭で，一般に年長者の発言を年少者は無視できないとされる。近親間では特に厳格で，子供は父親に叱責されても ghēr の隅で泣くだけで，成人後も口応えする者は非難の対象になる。

年齢秩序は性による秩序と組み合わさって Jāṭ 全体をおおう複雑な規制複合を形成するから，性的秩序についてここで簡単に言及する必要がある。Jāṭ 女性が自分の家族以外の男性に顔をみせない pardah[5]が性的秩序の基本であることを既に述べた（佐々木，1981b；p. 294 n. 2)。ただしこのことは女性が ghar から一歩も出ないことを意味しない。耕地で chamār その他の農業労働者を監督したり，または自ら特定種の農作業をする夫の所に，妻・娘が食事をもっていくのはかなり日常的である。pardah 規制はこの場合，途中で家族以外の男性に会った時に顔をみせないよう dushālā（ショール）で顔をかくすことを意味する程度である。しかし，その意味は決して小さくない。Chamār 等の農業労働者世帯では女性が朝から食事をもって耕地で働き，雇主である Jāṭ 等の地主自作農男性が近づいても，目と手をつかって農作業をしているために pardah を守れないことを考えれば，ショールを用いた pardah が特別な意味をもつことを容易に理解できる。

Pardah により隔離された女性の間にも，男性間と対応する年齢秩序が存在する。二つの序列の接触は制限され，近親者であっても男性は自分より年上の嫁入女性としか話ができない。二つの序列が複合される場合には，男性の秩序が先行する。女性の年齢順位が絶対年齢によらず，夫の年齢によるのはその表われである。つまり兄嫁は弟嫁より実年齢で年下でも年長者として扱われ，弟より実年齢で年下の兄嫁はその弟と話ができる。全員を一列にならべる時も同様である。外出する場合，原則として家族の成年男子（実際には夫）同伴でなくてはならず，その際には男性が前，女性が後を歩き，男・女とも年長者が年少者よりも前を歩く。牛車にのる場合には，男性が前，女性が後に座り，それぞれ年長者ほど前に座る。儀礼用の特殊な会食を除くと，食事を一斉にとることはなく，交代にたべるが，その場合年少者は年長者のあとで，女性は男性のあとでたべる。食事の序列から未婚者は除かれるから，最後に食事をとるのは，最年少既婚男性の妻，つまり「嫁」である。

Gērh に出入りするのは性・年齢秩序により順列される Jāṭ[6] だけではない。非 Jāṭ で最も多いのは Chamār の使用人（男性）である。かつては同じ村の特定 Chamār 世帯が従属身分として各 Jāṭ 世帯に附属していたが，現在では世襲的雇用関係はない。それでも同村の Chamār を雇入することが一応規範になっていて，他村だけから雇入する Jāṭ は非難さ

れる。Ghēr をもつ地主自作農は必ず Chamār 男性の労働者(mazdūr : (P)) を長期，時によっては短期雇入する。Chamār 労働者は gērh でも差別され，(B) baiṭakk に入らない。ただし半額で雇われる Chamār 男児は仕事によって，(B)に入ることがある。日中家畜を放牧するのはその家の男児または Chamār 男児で，扱いかたは他の場合と変わらない。同じ村の中間 caste は ghēr に入ることはできるが，家具の上に座ることができない。床・地面に直接座るのは被差別の象徴なので，ghēr に入った中間 caste はたったままでいる。

以上で ghēr での行動の規範を村内男性について述べたので，他村男性について言及する。重複になるが家族女性が顔をかくして ghar への出入りに横切る場合，及びその家族の最年長男性の妻が家族以外の男性がいない時に用事に来る場合[7]以外，ghēr に女性が足をふみ入れないことを強調しておく。他村の非差別 caste 男性が入ると，席をすすめられる。他村の被差別 caste は地面の上に直接座らせられる。手頃な椅子がない場合が多く，普通は chārpai (簡易ベッド(P)原意「四脚」) に座るようにすすめる。座った客が同じ caste であれば hukkā (水煙管) をすうようにすすめ，すすめられたらすわなくてはいけない。座らない客は自ら中間 caste であることを表示しているのだからそれ以上の行動をおこす必要はない。水煙管をすすめてもすわないのは他村の dominant caste ではあるが同じ caste でないことを表示しているのだからやはりそれ以上の行動をおこす必要はない。同じ caste で客が年長なら必づ上座 (簡易ベッドの頭側 : sarhnā : st. H. sar- (or sir-) hānā<sar (P)頭) にすわるようにすすめる。

Ghēr の一日は季節，月齢により多少の相違はあるが 4 時半頃から始まる。前夜，隅につんでおいた飼葉をカゴに入れて家畜に与える。Jāṭ 自らが作業する極農繁期以外には，常傭いの Chamār がこの仕事をする。Chamār が仕事を終える頃には Jāṭ も簡易ベッドからおり，nīm の枝先をおって口を掃除し，用を足すために，空き鑵等に水を入れ，特定の畑に行く。水たまりの多い雨期には水をもっていかない。特定の季節を除き朝食をとらないで，家畜を放牧に出し，耕地に出るから，6 時頃迄に ghēr は最低一人の老人と数頭の家畜を残して無人になる。最年長女性が ghēr に来るのは人の少ない午前中に多い。農閑期には隣近所の老人達が ghēr に集まり，終日水煙管を喫い，噂話やトランプ (tās : st. H. tāsh)，勝負の上の喧嘩で賑やかに過すが，その逆に極繁期には老人も収穫物の運搬・売却，場合によっては農作業の監督に動員される。女性が家事に忙しい午前中，幼児を ghēr につれてきて，老人がしつける[8]。昼—ghēr，夜—ghar の幼児生活は，近所の子供達と遊び仲間をつくるまでつづく。女児がその年齢に達すると gher の老人は pardah を守り ghēr に入らぬ様に注意する役目ももつ。

昼食時には男達が戻ってくる。畑に出ていた者は昼食前に水浴する。前述の順序に従って ghar へ行って食事をとり，ghēr に戻って昼寝をするのは12時半～1時頃である。簡易ベッドを(B) baitakk におき，昼寝がおわると(C) sahan に出す。冬には(C)においたまま太陽光で暖をとりながら眠る。昼寝の長さは労働の質・量によって異なるが，一時間程度である。早朝・日没後に農作業をする時には，午前中にも短時間休むことがある。使用人は自分の家で休むが，耕地で休むことも多い。他村からの通い被雇用者が(C) sahan の片端で休むこともある。昼寝後の時間は，村の小路を男達が歩きまわり，所々の ghēr で立ちどまって話をする社交の時間である。床屋がほぼ定期的に来るのもこの時刻である。この状態は牛が放牧か

ら帰る4時半頃までつづく。極繁期にはこんな余裕のないのはもちろんである。

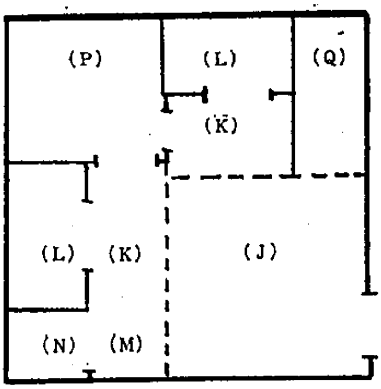
日没までに家畜の世話をすませ，男達はやはり前述の順序で ghar に食事をとりにいき，8時頃までに ghēr に戻る。夕食後に活動するのは「非常事態」を除いてなく[9]，すぐに就寝する。眠る前に ghar から牛乳をもってきて，若い男性が一人一人の簡易ベッドをまわって一杯づつのませる。昼寝も含め簡易ベッドの置き場所と出し入れは ghēr での生活に季節感を与える重要な要素である。11月第4週から3月第1週（Diwalī の祭りから Hōlī の祭りまで：佐々木，1981c 参照）の間は寒くなるので，(B) baiṭakk 内に置き，残りの期間は室内が暑く蚊が集まるので，(B)の前の(C) sahan におく。ただし寒くない期間の一部は雨期にあたるので，雨が降っている時間は(B)内におく。この場合でもできるだけ野外で寝たがるので，深夜に簡易ベッドの出し入れを行なうことが多い。

若い男性が収穫した穀物をとりあえず耕地周辺におくとき盗難を防ぐために畑で眠ることがある他は，ghar で母親と眠る幼児を除く全男性が ghēr で眠る。Ghēr では食事せず[10]，前述のように順々に ghar でとるから，ghēr での commensality は就寝前の牛乳以外には厳密には存在しない。また ghēr で眠る全男性間に厳密な財産の共有が存在するのでもない。例えば同じ(C) sahan の家畜のうち雌牛と子牛のみを共有し他を分有する所有者達が同じ ghēr で眠ることがある。したがって ghēr を同じくする男性の間にみられる一体感は，同一敷地・室内で眠る「共眠的」感情とでも呼ぶべきである。この「共眠」集団内で Jāṭ に一般的な年齢秩序を表現するのが jīt である[11]。同一 ghēr で眠ったことのある（またはそうみなしうる）年少者が，年長者に敬意を表する定型的動作で，年少者が年長者の前に蹲き，自分の額にあてた手を年長者の足に触れる行動をくりかえすのが jīt である。

(2) Ghar

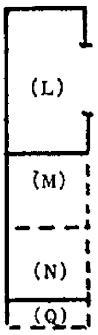
Ghar は home・house・residence などと訳され（Chaturvedi；1970），逆に household・family の訳語としてこの語からの派生語である gharānā が pariwār(S)とならんであげられる（Sanskaran, 1971）ように，標準 Hindī にも採用された伝統的農村での「いえ」相当語である。具体的には台所（及びそれと重複する「食堂」）・寝室等を一体的に指す。その他に祭礼・儀礼の場であることにも注目すべきである（佐々木，1981c：p. 29）。第一図の西北隅にはめこむようになった ghar の最小間取りを第二図に示す。13 m強平方で，三世代5人よりなる線型拡大家族（line-ally extended family）に対応するのは第一図と同様である。

出入り口に面して(J) maidān((P)中庭：原意「空間」)があり，これを囲んで二組の(K) baramdā（(P)ベランダ）＋(L)寝室（単に kamrā：「部屋」とよばれる）がある。(K)は寒い時期以外就寝場所とされ，(L)で眠るのは冬だけである。昼寝がその逆になるのは gher での(B) baiṭakk—(C)sahan と同様である。室内での儀礼は(L)で行うことが多い。二つの寝室的空間（K＋L）をL



第二図：Ghar の基本的間取り
(1/150)

字型に配置するのは，お互いを見通さないためである。Ghar の外周を小さくするのが防犯その他の理由で好ましく，（K＋L）を増築するには(J) maidān を囲んで配置するのが合理的で，必要があれば（K＋L）を居住する基礎家族数だけ設ける。(M) rusaī (st. H. rasōī) は (K) baramdah と同水準の床面の台所で，(N)は食品その他家事に必要な物置である。(P)は穀物室である。農村に大量貯蔵される基本財である穀物は盗犯の主対象であり，夜間に非常に堅固とはいえない日乾レンガの壁をひそかに破って盗むことが多いので，その音を早くききつけるように（K＋L）の配列された角に(P)をおく。(Q)は燃料小屋で，不衛生な乾燥牛糞 (uplā) を用いるので，出入り口に近く設ける。



第三図：
Chamār の
ghar (1/150)

Ghar の基本的間取りとしてもう一つの第三図の Chamār の ghar をあげる必要がある。Ghēr のほとんどが Jāṭ のものだから，前項では Jāṭ のもののみを説明すれば充分だったが，ghar では第一図よりもはるかに小規模なものがもう一つの基本的間取りになっている。それが Chamār の住む ghar で，(L)・(M)・(N)・(Q)を一列にならべたものである。劣悪な衛生・健康状態下で生活する Chamār では成人する子供の数が多くなく，平均寿命が短かく夫婦が複世代累積をみせないから，同じ ghar に数世代住みつづける例外的場合でも(L)は単一でよい。厳寒期以外は(L)の庇の下で眠れるから(K)は不要である。同様に(Q)も小屋掛けで充分である。また Chamār は農業経営をしないので種子・売却用穀物を収納する(P)が不必要で，周囲に壁がないので(J)中庭もない。第二図と第三図の比較から，dominant caste から被差別 caste に至る全村民に共通した間取りを確認できる。それが一つの基礎家族に対応する((K＋)L)＋(M＋N(＋Q)) の組み合わせであり，基礎家族が複合すると n((K＋)L)＋(M＋N(＋Q))の間取りとなり，Jāṭ では農業経営と外壁の存在が n((K＋)L)＋(M＋N(＋Q)＋(J)＋(P)) の間取りをとらせると分析できる。

以上から明らかになるのは建造物 ghar が基礎家族と対応する空間配分を基本とすることである。普遍的な「家族」の概念に最も近い意味で 'ghar' を用いる (Eglar, 1960；p. 32, 74) 場合，社会集団としての 'ghar' が拡大的であることもあれば，そうでないこともあるが，基本的にはどの 'ghar' にもみられる単位的な基礎家族を指すとみるのが妥当である。単位的基礎家族は（K＋L）に対応し，社会契約上は結婚 (shādī) とともに成立するが結婚直後から妻は夫側に居住しないから，実質的な成立は結婚式と同時でない。Ghar での同居が始まるのは，妻が10代終末，夫が25才前後のことが多い。それまでは「既婚者」ではあっても，互いの親の ghar を訪問しあう。妻が夫の ghar に来ると夫は ghēr よりも ghar で休むことが多くなり，やがて子供が生まれて基礎家族が成立する。一組の（K＋L）に住む基礎家族の内部に子供が蓄積され，基礎家族は10～15年間量的に拡大し，そのあと第二世代の結婚によって縮少し，夫婦の死亡とともに消滅する。

以上は独立した 'ghar' の life cycle であるが，場合によって基礎家族は拡大家族の構成単位である。この場合には拡大家族全体が１つの 'ghar' であるが，その内部では単位間を男性成員が自由に動くことを pardah が規制している点が特徴的である。一つの 'ghar' としての一体性を，異なる単位間の集合的教育対象としての子供と，拡大 ghar の中を無制限に移

動できる女性[12]とによって表現できる。近隣の同 caste の女性・子供も他の ghar に入ることができる。ところが男性にとっては自分の属する単位的基礎家族のみが自由に会うことのできる範囲である。つまり拡大家族は男性部分と女性部分に分割され，それぞれが一体的感情で統合されてはいるが，二つの部分が接触するのは男性が食事をとりにいく時だけ，という原則が「タテマエ」になっており，しかも特定の接触範囲が設定されている。

Pardah 規制があるために，拡大家族内部にはいくつかの定型的行動が観察される。食事をとりに自分の夫より年上の男性が ghar に入ってくると嫁入女性は急いで，他の部屋の中，ドアのかげ等に隠れ，息をつめる。不測の遭遇を避けるために成人男性が ghar に踏みこむ時には，出入り口の扉の前で幼児の名前を呼び，または咳払いをして，入る者がだれかを諒解させなくてはならない。時刻によっては ghar の女性が服をつけていないこともあり，筆者も黙って入ったら中庭で主婦が入浴中だった経験がある。拡大家族が分裂して一代経つと，このようにしても ghar に入れなくなる。危篤・葬式が他 ghar の人を入れさせる唯一の例外である（佐々木，1981b：p. 302）。単位基礎家族が複数集合して，一つの台所で交代に食事する場合には，いづれの構成員も 'ghar ka ādmī' とよぶから，拡大家族全体が 'ghar' であるのは確実である。しかし特定の成人男性を中心に考えると，拡大家族女性が居住し生活する 'ghar' は単に入っていくことのできる空間にすぎず，いつでも入って自由に接触し家庭生活のおくれる 'ghar' は単位的基礎家族に限定される。

単位的基礎家族と拡大家族の家族的結合の水準の相違を明確に物語るのは親族呼称である。単位基礎家族以外では拡大家族形態の有無にかかわらず，reference term[13] と adress term は同一であるが，単位基礎家族内では二つの用語に分化がみられる。子供は母親を bibbī(< bēbu (Punjabī) Z)，ammajī，bewī，父親を bappū，chacchā (<FyB)，babujī（やや新しい用法）と呼ぶ。夫婦が相互を固有名詞でよぶことはなく，妻は夫を jī，unhẽ とよび，夫が妻をよばなくてはならない時には，子供が母親を呼ぶ用語を借用する。両親が子供を，または子供同志がよぶ時には固有名詞を用いる。時に Z を bibbijī，bubbū，B を bhai，bhaiyajī とやや諧謔的によぶことがある。同居父系並行従兄弟・姉妹にもこの用法を拡大的に援用する。住居 pardah 規制・親族呼称の分析から結論できるのは，北インド農村居住者の家族の基本的な形態が基礎家族的であり，拡大家族は所与の条件を満たしつつ拡大できる二次的な形態である，ということである。この点については(3)でさらに考察するが，以下では ghar での生活をより具体的に理解するために，いくつかの項目について略述する。

Ghar の一日は非常に早く始まる。女性が男性よりも早くおきて暗いうちに特定の畑まで排便にいくためである。非差別 caste の女性は原則として日中 ghar にいて，排便のために畑に出ないから，日中の排泄は fāslā（牛の飼葉おけにつかう鉄製の浅い丸皿）に灰をしき，使用後また灰をかけ， ghar の出入り口附近におく。畑に出られない病人・老人も同じ方法をとる。朝食をとるのは一般的でないから，それに関連する作業はないものの，11時頃までは早朝の ghī（バターミルク）造りに始まり，衣服修繕・精米・粉ひき・野菜切り・香料と調味料の準備・糸とりなどで忙しい。11時頃から昼食の準備が始まり，1時頃まで昼食がつづき，食後はミルクをあたためる。昼食をとるのと並行しながら準備し，最後に「嫁」がたべて終了する。原則として男性が ghar に入って食事するが，時には ghar から ghēr まで男子に食事を運ばせたり，女性が ghar から畑まで運ぶこともあるのは前述したとおりであ

る。昼食後1時半頃までに水浴し，その後昼寝をする。起きると簡単な手仕事をしながら集まって雑談する。4時近くに牛乳をあたため，約半分を男性用として gher にもたせ，残りを自分達が飲む。4時頃から夕食の準備が始まり，6時頃から男性が交代で食べ，その後で女性が食べる。日中は ghar の外に出られないが，日没後近くの ghar で数世帯の女性が集まって話をすることが許されている。Ghēr 同様，就寝前に牛乳を飲む。

Ghar が幼児教育の場でもあり，ghar の状況と ghar を中心とする子供達の社会を媒体として，身分的分化を再生産するのにも注目する必要がある。子供達の社会が非差別 caste (Jāṭ と中間 caste) の子供達と被差別 caste (主として Chamār) の子供達のそれに二分されることは一見して明らかである。幼児期では母親が ghar を遠く離れることが pardah によりできず，近隣の (同一 caste) 世帯に限定される。やや大きい Jāṭ の子供達が野外で遊ぶ場合，Jāṭ だけで遊ぶことが多いが，この caste 完結性は Jāṭ が最大 caste である結果であって，同じ chārpai に座らなければ，非差別 caste は原則として一緒に遊んでよい。中間 caste の世帯数は一般に少なく，単独で遊び仲間がつくれないから，Jāṭ の子供と一緒になることが少なくない。各々の caste の人口規模の小さかった近代以前には遊び仲間の caste 完結性が現在よりも低かったとみるのが妥当であり，その状態では Jāṭ・中間 caste を含めた非差別 caste 全体の連帯感が今より大きかったとみるのも妥当である。

非差別 caste では母親が賃労働に出ないので，家庭で幼児教育を行える。なかでも Jāṭ では顕著に平均寿命が長く，前述のように子供達が幼児期に老人（多く男性）と接触することもあり，被差別 caste の子供に比し，一般に幼児期の発達が良好である。中間 caste では成人男性の家内労働時間の長い caste で状態が良い。Chamār では平均寿命が短かく，母親も賃労働に出て不在がちなので，Jāṭ のような家庭教育が不可能である。中間 caste の比較的条件の悪い部分でも，caste 毎に住居が一ケ所に集中する傾向があるので，その居住区に老人が一人いれば家庭教育を多少助けることができる。ところが Chamār では上述のハンディキャップに加えて，人口の社会移動が大きくて親族組織が発達せず，中間 caste に比すると住居が散開し，親族が集住する傾向が小さいので，幼児達にまで目がとどかない。また学齢期に入るころから雇われて働くので，年長の子供達が幼児に影響を及ぼすことが比較的少ない。Chamār のこの環境から子供達は，ただ集まって，水・泥をかけあい，棒で土をほり，追いかけるといった単純な遊び方にかたむく。被差別 caste の子供達の遊ぶ様子は子供らしい喚声にあふれているが，やや自虐的な印象をも与える。この印象は夜になって酒を飲み居住区で騒ぐ大人の Chamār とも共通している。

Jaṭ の子供達の遊びは多様である。屋外での男女一緒の遊びは年少者が行うので具体的なルールのあるものが少ない。雨期には池の周りで遊ぶことが多く，やや年長の男児の中には汚水のまじる溜池で泳ぐものもいる。食事を狙うカラスをつかまえたり，インコをカゴに入れてかったり，乾期に水が干上ってはい出した池の亀を遊び道具にすることもある。学齢期に入る頃からの女子の遊びには石けり，あやとり (tirkī)，綱とび (rassā) がある。男子の遊びは多く二人で行う。特に人気のあるのは icchī ḍanḍā と bōk-bakrī である。Icchī ḍanḍā には二つの道具をつかい，それが語源である。まずAが穴をほり icchī (木片)をおき，これを ḍanḍā (「上腕」が原意) ではねとばし，Bが着地した icchī をひろい，その場で ḍanḍā を用いてまたはねとばす。Bがはねた icchī をAが空中でとると最初に戻る。とれない時に

は着地した icchī をAがその位置からもとの穴の上においた ḍanḍā になげあてる。あたるかまたはあて損ねた icchī が ḍanḍā の長さよりも短かい半径をもつ穴中心の円内にある時には最初に戻る。上述の円内に出た時には，A・Bがそれぞれ三回づつ icchī をとばし積算距離の長い方がはね手となり最初に戻る。

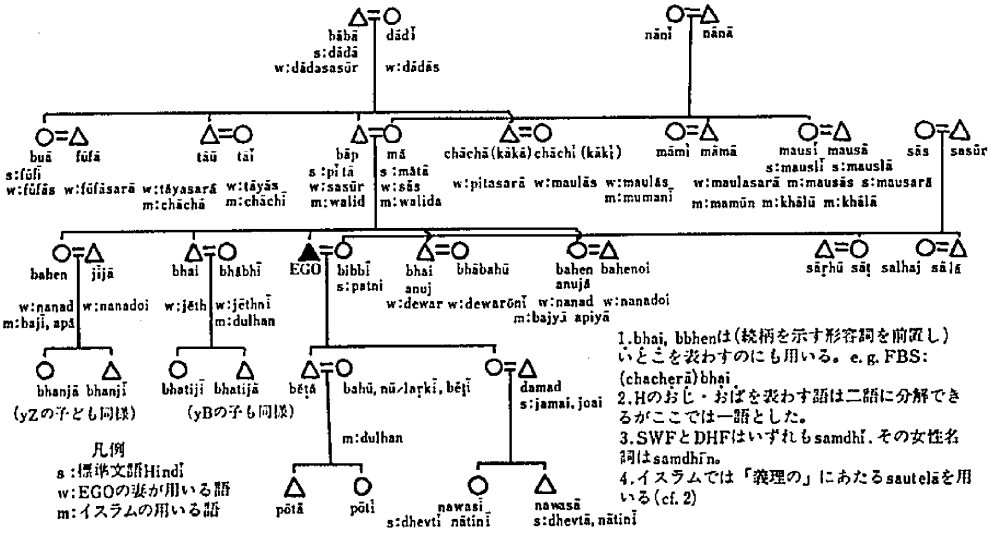
Bōk-bakrī（雄山羊一雌山羊）は対局者を山羊にみたてた一種のはさみ将棋である。三重同心円に8本の放射線をひき，24の交点一つ一つに小石をおく。ルールは (i) 小石を一つづつ動かす，(ii) 相手の石をとびこした時にその石をとる，の二つで，相手の石をできるだけ多くとるのが目的である。あいている中心点に石を動かすと勝負が開始する。Bōk-bakrī は村の子供達が行なう最も知的な遊びで，主として Jāṭ の学齢以降の子供が行なう。他の caste では複雑な遊びのできる年齢には家計を助ける必要が生じる。この他に祭りと関連した遊びがある[14]。

(3) Jāṭ 家族の拡大性

Jāṭ 家族の基本的形態が基礎家族的であるとみられることを前項では住居・pardah 規制・親族呼称から結論した。この項では Jāṭ 家族の内部構造から，拡大家族が内部的緊張の高い不安定な存在であることを述べる。拡大家族内の緊張は，父系社会の構造的弱者である嫁入女性に典型的にあらわれる。これが定型化された sās ('mother-in-law' つまり嫁姑）関係である。若い嫁入女性が夫の母親に服従するというこの原則は，男性間の年齢秩序と同類型であるが，男性間では血縁的，または前述の「共眠的」一体感が権威的服従をある程度緩和するのに対し，嫁姑間では心理的葛藤・内部的緊張が極度に高まる。また拡大家族内に嫁出すべき女性がいると，この女性が生家では女性間の年齢秩序に拘束されないので，若い嫁入女性の緊張の大きな原因となる。つまり拡大家族形態をとるかぎり，嫁は姑の権威主義的抑圧と夫側未婚女性の心理的圧迫をうけつづける。Pardah により夫の同居親族で夫より年少の者と話のできることが，この緊張をときほぐす定型的な関係を準備するとはいえ，sās 関係にみられる拡大家族内部の社会関係は，Jāṭ 家族の拡大性を疑わせる。

拡大家族内の緊張の象徴である sās 関係は性と年齢の総合的規制・秩序である pardah の具体的表現である。一方 pardah は女性を ghar に隔離し，家族の男性以外に合わせない[15]規制とみなされるから，拡大家族内の緊張が女性，特に若い嫁入女性に集中するかの印象をうけるが，男性にとっても拡大家族が大きな心理的負担となる。これまで明らかにしたように，男性にとって ghar は自分の基礎家族のいる場所であり，拡大家族を形成する場合には年長者の妻と話のできる場所という副次的意味が加わる。それゆえ，娘が嫁出し，妻に先立たれた老人にとって ghar は食事をとるだけの場所になる。インドでは一般に女性の平均寿命が男性より短いので，この事態の出現頻度は高く，場合によるとかなり長期間 baiṭakk で寂しい時間を過すことになる。老人がこの状態を解消するには若い女性と再婚するしかないが，拡大家族内の心理的増大を倍加させることからもこの手段をとりにくい。

内部的社会関係から生じる緊張関係を解決する構造がほとんどないのにも係わらず，二次的に拡大形態をとる強い傾向があることは，Jāṭ 家族の基本的形態が基礎家族的である一方で，拡大形態を支持する別の原則が働いていることを想定せしめる。前述のように単位的基礎家族は親族用語上特徴的範囲を形成するが，拡大家族も同様に特徴的範囲として用語図表



第四図：北インドの親族用語 (reference term)

上に同定できる。Jāṭ 農村が濃密に分布する地域の親族用語は方言的変異を除き均質で第四図に示した reference term により構成される (cf. Ansari, 1959；p. 74, Leaf, 1971；p. 550, Vatuk, 1969；pp. 98～100, 1972；pp. 791～792)。通常みられる拡大家族を形成し，内部で pardah を守る可能性のある範囲では，FeB・FyB, eBW・yBW, HeB・HyB, HeBW・HyBW，つまり年齢順位を弁別できるように準備してある[16]。Ego より下の世代では基礎家族内と同様，図の用語を reference に用いないので，年齢順位を表示しないが，同じかまたは上の世代では図の用語を adress にも用いるので，年齢順位がいつも意識される。

Reference term に表われた二次的拡大形態支持原則の overt な存在理由が拡大形態内での pardah 順守にあることは明瞭であるが，より重要で covert な存在理由を広域政治関係形成に求めるべきである。Reference term を adress に用いる必要のない，関係の自明な基礎家族内の関係と，拡大形態内の最年長男性を頂点とする厳格な年齢序列(Luschinsky, 1961；p. 302) とは明らかに異質であって，後者は二重・三重の姻戚関係を通じる拡大家族擬制を展開することによって，村落間政治組織を形成する (Pradhan, 1966；p. 120) 中世的機能を有している。つまり拡大形態は dominant caste がもつ伝統的政治関係が家族に投影されたものと考えるべきである。Ghar での女性間序列を表示するのに jīt を用いる (Gideon, 1962；p. 1223) のは，親族に限らず一般的な男性間序列を表示し，行動を定型化して広域組織を可能にする jīt を拡大形態 ghar 内にもちこんだものといえる。基礎家族内に権威主義的支持原則がもちこまれると，性関係が抑圧される。Ghēr で眠る夫が ghar の妻を訪ずれるのは ghēr の男達がねしずまった夜中で，明け方以前に部屋を去らなくてはならない (Luschinsky, 1961；p. 301) とされる。

拡大形態を Jāṭ にとらせる権威主義的原則が，北インド農村の支配構造に密着した支配性の象徴であることを以上から理解できる。したがって，弱少 caste 群では拡大形態をとりえないことを容易に推論できる。Dominant caste 以外では (i) 不動産が Jāṭ に占有されるために男女の眠る場所を分割できないので，ghēr・ghar の二本立てによる拡大家族形成がほぼ

不可能である[17]，(ii) 成人する子供の数が少なく，また多くても経済的基盤が脆弱で一つの世帯に集合させて就業できないので，他に移動し neolocal な居住に傾く，(iii) 男女とも成人する子供の数が少なく pardah を展開すべき人的資源がない，等の現実的原因から，拡大形態が稀であり，結果的に単位的基礎家族が家族形態の最大枠になりがちである。

Jāṭ 家族の一次的形態を基礎家族的と考える上で，拡大家族の男性構成員に一体感を与える ghēr は支障になる。しかし ghēr は必づしも伝統的と考えられない。Ghar-ghēr 両居制は北インド西半に広く分布し (Srinivas, 1965；p. 555)，chaupāl(st. H. chaupahlū？<chau (4)+pahlū(P)：面)：「4面を壁で囲んだ」の意か)・baiṭak 等とよばれる。Ghar が村の中心部に，ghēr が周辺部に (Singh & Pareek, 1966；p. 55)，次々に立てられ，集落が拡大し (Pradhan, 1966；p. 20)，男児が12才前後で ghēr にうつる (Mandelbaum, 1968；p. 31) 等の慣習・現象が北インド各地にみられるから，ghēr が Jāṭ の間で一般的に用いられたかの印象を受ける。しかし Panjab では ghēr 相当の男性用 'guest house' (baiṭak の英訳) は村会を開く chaudhrī (村長) の地位の象徴であり，村に一つしかない。Baluchistan でも男性専用の独立建造物が村に一つしかない例が報告されている (Papanek, 1973：p. 294) から，現在のように ghēr を Jāṭ の全世帯がつくるようになったのは，農村経済が急速に改善された19c後半以降 (佐々木1980：p. 97) の現象と考えた方が妥当である。Ghēr が壁に囲まれた独立した居住空間として普及する以前には，Jāṭ 男性も大部分の時間を ghar 内または ghar に隣接した小さな baiṭakk で過したとみられる。拡大家族形態をとらなければ，pardah 規制も単純なので，特に間取りを大規模にしたり，定型的行動をとる必要がないのも明らかである。

Hindū joint family 論では家父長権が強調され，結婚後も息子達が拡大家族をつづけることを定説的に主張するが，北インド農村では「家父長権」の存在が基礎家族の一次性の支障にならない。確かに結婚後5～7年位，既婚の息子は父親の命令に服従する (Pradhan, 1966：p. 62)。が，このことを逆にみれば結婚後10年以上経てば父親が家父長権を喪失するともいえる。前述したように高瀬度で妻に先立たれた独身老人が発生し，家庭から半ば切り離されることが少なくない。また結婚年齢がそれほど高くないから，既婚男子が父の家父長権から自由になるのは予想外に早い。つまり終生決定権をもつ父親の統率下に生活することは Jāṭ では稀で，複数の同居既婚兄弟は相互の対立があれば，同居者内で調停する者がいないので，簡単に別居する。複数の既婚兄弟が同居し，かつ父親が終生決定権をもたなくても，特定の既婚男子を選んで父親が家父長権を移譲すれば，別居分住を抑制できる。しかし特殊な例外以外，厳密な均等分割が志向されるから，家父長権が継承される機構は存在しない。

北インド農村の「家父長」は，それゆえ実質的には基礎家族の父親であった，とするのが適切である。この父親の統率下で女性を含めた全員が農業経営に直接参加することにより，一体感を強化していた。現代の Jāṭ 女性の労働は家事に限定される (Eglar, 1960；p. 59) が農作業忌避思想は独立後に普及した (Nath, K., 1965：p. 813) もので伝統的でない。Pardah により女性は家族男性以外に顔をみせないが，このことは女性が農作業一般を行なわないことを意味しない。視界の広い農地で家族男性以外が近づいてくれば顔をかくして作業を中断できる点が，Jāṭ と作業継続を強制される Chamār との相違である。雇入労働者が農地にいる農繁期 (犁耕・播種及び収穫期) 以外のほとんどの農作業を女性が手伝い

(Mathur, 1968 ; p. 262), 家畜の世話も手伝った[18]。現代でも，他家女性と合うのが早朝排便時・日没後に限られる (Luschinsky, 1963 : p. 67) 一方で，集落・農地間を往復するのが認められているのは女性の作業参加の残存である。嫁入女性は拡大家族の夫より年長の男性と作業できないから，Jāṭ 女性の作業参加が，農作業・農業経営が基礎家族単位であることを前提にしていることにも注目すべきである。

以上の考察から Jāṭ 家族が基本的には基礎家族構成であったことを結論できる。家屋・親族用語・労働力分配等からみて基本的構成が単婚的である (Luschinsky, 1961 ; p. 301) のは明らかで，拡大形態は雑多な理由から (Pradhan, 1966 ; p. 61) 単位的基礎家族が集合したものであるとみるのが適切である。ここで基礎家族構成が「基本的」であったと表現するのは，Jāṭ 家族を定量的に扱えば，基礎家族構成が過半数に達した，という予想を定性的に表現しているのであって，Jāṭ 家族が「本質的」に基礎家族構成であったことを主張するのではない。家族が基本的に基礎家族構成であるのはむしろ当然であり，Jāṭ および北インド農村居住者の家族を社会人類学的に考察する上で重要なのは，二次的な拡大を可能にする原則の究明である。この稿で，この原則を単に政治的機能をもつ権威主義的原則とのみ述べて，それ以上の分析を後稿に譲るのは，この稿の冒頭に述べた目的によるのであって，上記原則の究明が完結した，または不要であるとみなしているためではない。

現在でも各種の拡大家族が少なくなく，また民族誌的調査がなされるようになった時点での被調査者が直接体験できた最も古い時期の北インド農村に拡大家族が今より多少多かった可能性は否定できないから，拡大家族が分解して基礎家族になりつつあると農村居住者がほとんどの場合にも述べるのが，必づしも不正確であるとはいえない。ただこの分解傾向が一時的ではないが近代的現象と考えるのが，北インド経済史から考えると妥当である。Jāṭ の各世帯に ghēr をつくらせるようになった農業経済の発展過程では，農業経営による収益の大部分は，経営の拡大と生産の増大にむけられ，住宅投資のようにコストが高く，経営効果のない経済活動はどちらかといえば後まわしにされたとみられる。近世支配が崩壊し，地主自作農の収益条件が急好転した19 c 後半には，居住に関する欲求水準が低く，しかも Jāṭ の居住区が中間 caste 等に囲まれて連続的に拡大しにくく，加えて成人する子供の数が近代化につれて加速的に増えたから，限られた敷地に共卓的拡大家族 (shamlat ka ghar:[19]) をつくる必要も大きかったとみられる。拡大家族が増加するのは近代化の相当長期にわたるある相であって，現代でもこの相が連続しているとするのが適当である。

近代化が加速した同世代複夫婦家族への拡大傾向に比し，基礎家族に不婚成員を加える方向は近代化以前からある伝統的な拡大傾向 (Pradhan, 1966 : p. 63) であると認められる。Jāṭ の joint family 志向とよばれる傾向は，夫の年老いた片親 (特に母親) を家族内にとりこむ線型拡大傾向もふくめ，適齢期をすぎた未婚女性・寡婦等の近親不婚者，つまり性と marital status から家族外に社会的に評加されうる雇用の機会がなく経済的にも弱者たらざるをえない部分を家族内に収容する方向づけとみるべきである。公的社会福祉がないに等しく，他方では身分の維持が最重要の社会目標である北インド農村では，弱者である不婚者が単独生活により，その caste に期待される地位を保てず，低い caste に混入して身分関係を混乱させる事態を防ぐには，家庭に多少の混乱と負担が生ずるにせよ，家族内に不婚者を収容する以外の方策のないことが，この伝統的拡大傾向の背景にある。

Jāṭ 家族の伝統的構成が基礎家族＋不婚近親者の形態をとり，単婚的だったことを以上から結論できる。一組の夫婦の複数の息子が結婚し同居して二世代複夫婦家族形態をとることがあるが，父親の死去によりこの拡大形態は直ちに分裂をはじめる。前近代的な生命状態では二人以上の息子が成人する確率が近代化開始以降に比して低く，また息子が結婚してから父親が死去するまでの期間が比較的短いから，二世代複夫婦家族の出現率は予想外に低かったと見積られる。分裂の第一段階は共卓性の喪失で「炉（chullah）分割」と表現される。共卓性（commensality）のある状態でも家族構成員が一同に会食することがないのは前述したとおりであり，共卓性喪失を表現するのに炉分割が最もわかりやすいことがこの表現をとる理由である[20]。炉分割が意味するのは食糧（主穀）備蓄の分割（Mandelbaum, 1968；p. 32）で，これが結果的に農業経営分割を意味する播種用主穀分割でもあることが経済的には重要である。

共卓性を喪失した niarā ghar[19]は基礎家族的単位の集合した「家連合」にすぎない。この段階では住居の共同があるが，第二段階に分裂が進み前述した maidān の間仕切りをつくると共住性も喪失する[21]。分裂の第三段階で公課負担・占有権登記が分割されると旧拡大家族内の基礎家族的単位間の関係が消滅する。分裂の第一段階から第三段階への移行が非心理的理由――たとえば住居を新・増築しにくくする経済的要因――によって妨げられる[22]と拡大家族（一世代複夫婦型）が少しだけ長くつづく。このような要因が地域的に生じれば，その地域全体で拡大家族の出現率が高まる。以上から明らかなように，Jāṭ の家族構成は近親不婚者を収容する基礎家族が基本であり，一時的に拡大形態をとるだけである。Jāṭ 以外の caste では一般に家族構成員数が経済的，人口学的条件から小さく，拡大形態をとることが Jāṭ よりももっと稀である。つまり Dhādekī-Sālhāpūr には恒常的な joint family が存在しないと結論できる。たとえ一時的にせよ拡大家族を可能にする原則の究明は別稿で行なう予定である。

註

1) 現地語の語源を表示するときには，(A)アラビア語，(P)ペルシア語，(S)サンスクリット等と表示する。現地語と標準ヒンディー（st. H.）の型が明瞭に異なるときには後者も併せてあげた。

2) この場合でも均等分割相続が行なわれ，両親とともに中心部にすみつづける末子の社会的地位が高くなることがないから，「末子相続」的であると考えるのは妥当でない。

3) 「渡さなくてはならない（dēnā zarūrī chahie）」とする規範がある。近親（兄弟・父の兄弟及びその息子）に優先的に敷地を売却する理由として，感情的理由の他に，買いたたかない，相互に信用がある（分割払いになることが多いので），の２つを村民はあげている。

4) Salār ((P)命令者<ṣalā (A))姓は北インドでは歴史の古い苗字である（Baden-Powell, 1972；p. 122）が，現代の Dhādekī の Salār 達は Urdū 風のこの苗字を嫌って，Sikh Jāṭ 風の 'Singh' で代用している。

5) pardah は男性から女性を視覚的に隔離するための薄い布全般をさす（ショールもその一種）が，同時に隔離規制，及び年齢秩序と組み合わさった規制複合全体を意味する。

6) Jāṭ 女性をさす Jāṭnī を用いて，Jāṭ-Jāṭnī と表現するのがこうした場合の通例で，この表現は pardah のあらわれであって，ここでの考察と密接に関連するが，繁雑なので Jāṭnī を省略した。

7) この女性だけが家族の全男性と顔をあわせられるので，ghēr で手をつかって作業しうる。

8) 夫婦が夜間 ghēr・ghar に分かれて眠るので，昼間会うことと関係がある。

9) 「非常事態」は「緊急 panchayat」とよばれる。筆者が見聞したのは2例だった。一つは Jāṭ が牛車で Chamār をひいて重傷を負わせた事態に対処するために非形式的集会を開いた例である。もう一つは村の周囲の溜め池埋め立て後の土地分割が紛糾し，行政機関とのやりとりに対応して何回か昼間の会合をくりかえしたあと，検察官が調停に来る前夜にひらかれた例である。

10) 老人が(B) baiṭakk で食事することはある。

11) pranām(S) は全く用いられない。

12) 拡大家族内の人間関係の特徴を男性観察者と未婚女性観察者が全く異なるものと報告しがちなのはこのためである。

13) reference term は標準 Hindī とほぼ同様である。第四図参照。

14) Hariyālī Tīj 前後のブランコ遊び，Hōlī の前の qabadi が代表的である（cf. 佐々木 1981c：p. 21, 28)。

15) 家族男性以外が ghar に全く入れないわけではない。現代では近代的職業をもつ同程度より上の caste に属する主人の友人，たとえば大型農業機械の販売員・穀物商等を ghar の rusaī で接待することがある。この場合には家族男性が給仕し，客は女性の姿を見ることも声を聞くこともできない。家族男性以外で伝統的に ghar に入れたのは，嫁入女性の生家の父系親族のうち同世代かまたは下の世代の男性である。祖父・父・父の（同居父方従）兄弟は ghar に入れない。嫁入女性の母方祖父・母の（同居父方従）兄弟も入れない。ただし嫁入女性が危篤に陥った場合はこれらの人々の入家が例外的に認められる。嫁入女性の（同居父方従）兄弟は ghar で嫁入女性，その他の女性と話ができるが，rusaī で会わなくてはならない。また当該女性の夫の（同居父方従）弟に嫁入した女性とは同席できない。当該嫁入女性が死亡すると，その（兄居父方従）兄弟等は ghar に入れなくなる。つまり，ghar に入る姻族は一代毎に更新される。

既婚女性は，隣近所の同 caste の ghar と生家の ghar 以外に入ることは原則としてないが，ZH, SWF または SWB, BWF または BWB の ghar を訪問できる。それぞれの ghar で，W, DM または ZM, DH または ZH とみなされ，それぞれHより年長の男性，SWF より年長の男性，BW より年長の男性とは同席できない。HZH の ghar は，HZ の子供達からみて当該女性が通過儀礼上重要な māmī にあたるので，訪問が必要であるが，HZH より年長の男性と同席できない。女性が上記の4つの ghar で食事する時にはその ghar の女性が給仕する。

16) 同世代以上で年齢順位を表示しないのは嫁出女性と 'bhai' だけである。嫁出女性は生家の順位から自由であり，'bhai' は pōtā (SS) と同じく (Freed, 1963；p. 91)，専ら拡大的に用いられ (Eglar, 1960；p. 108)，家族内で reference・adress 双方に使用されない，という理由から表示しなくても差し支えない。なお eZH・yZHを区別するが，ZH が拡大家族に加わるのは例外的である。

17) 雇用があれば中下層男性は昼間 ghar から離れ，夜間のみ収容する場所があれば充分だが，実際には失業率が低くないから，男女とも狭い ghar に残留する率は季節的には予想以上に高い。

18) 農繁期に家族女性の労働力を農地に投入しないのは一見不合理にみえるが，いづれにせよ家族外から労働力を雇入しなければならない農繁期の農作業を雇入労働者にまかせ，女性労働力を家畜の世話にまわすのは全体的労働力供給の減少をもたらさない。また農閑期に女性労働力を農地に投入すれば，家族外から雇入する必要が全くなくなるから，家族女性労働力を農繁期には家内に農閑期には農地に投入するのは合理的でもある。

19) shamlat ka ghar は「shamlah (P：ターバン，帯をまいてとめるためのおりこみ）の（ようにまとまった）家族」という意味と考えられる。非共産的な，つまり食事は別だが財産を共有している，またはしていないで同じ ghar に住む拡大家族を niarā (niarnā「近づく」の受動分詞形) ghar と呼ぶ (Sharma, S. P., 1973；p. 91)。

20) 炉 (chullah) に関する祭礼等が全くないことについては別稿 (佐々木, 1981 a. b) 参照。つまり炉分割は儀礼的意味をもつ表現ではない。炉が設備としても極めて簡単なものであることを別稿で述べる予定である。

21) 既存の家の maidān に壁をつくって分割する習慣は現代では広汎にみられる (Ahuja 1966 ; p. 34, Sharma, S.P., 1973 ; p. 93) が, 家屋様式からみてやや新しい現象ではないかと考えられる。

22) 宗教的起源をもつ心理的理由が重要であるかのような通念を実地調査で補強することはできなかった。拡大家族の分裂過程を通じて嫁入女性間の対立 (khāz) が働くとするのが一般的だが, むしろ世帯主男性間の対立を実質的とみる (Pradhan, 1963 ; p. 62-63) のが妥当である。

参 考 文 献

Ahuja, Ram 1966 "Family Pattern among Bhils" *Eastern Anthropologist* XIX pp. 29-42

Ansari, Ghaus 1959-60 "Muslim Caste in Unttar Pradesh : A Study of Culture Contact" *Eastern Anthropologist* XIII (2) (i)-84 (special number)

Baden-Powell, B.H. 1972 (originally in 1896) *The Indian Village Community* Cosmo Publication (New Delhi)

Chaturvedi, M. and B.N. Tiwari 1970 *A Practical Hindi-English Dictionaty* National Publishing House (Delhi)

Eglar, Zeklye 1960 *A Punjabi Village in Pakistan* Columbia University Press

Freed, Stanley 1963 "Fictive Kinship in a North Indian Village" *Ethnology* II pp. 86-103

Gideon, Helen 1962 "A Baby is Born in the Punjab" *American Anthropologist* LXIV pp. 1220-1234

Leaf, Murray J. 1971 "The Punjabi Kinship Terminology as a Semantic System" *American Anthropologist* LXXIII pp. 545-554

Luschinsky, Mildred S. 1961 "Traditional Village Culture in Modern India" *Journal of Human Relations* IV pp. 300-311

Luschinsky, Mildred S. 1963 "Problems of Cultural Change in the Indian Village" *Human Organization* XXII pp. 66-74

Mandelbaum, David G. 1968 "Family, Jati, Village" in Singer, Milton and Bernard S. Cohn (ed.) *Structure and Change in Indian Society* Wenner-Gren Foundation of Anthropological Research

Mathur, Man Singh 1968 "Rural Change in Perspective" *Economic and Political Weekly* III pp. 259-265

Nath, Kamla 1965 "Women in the New Village" *Economic Weekly* XVII pp. 813-816

Papanek, Hanna 1973 "Purdah : Separate Worlds and Symbolic Shelter" *Comparative Studies in Society and History* Vol. XI pp. 289-325

Pradhan, M.C. 1966 *Political System of Jat in Northern India* Oxford University Press (Bombay)

Sanskaran, Dwitiya 1961 *An English Hindi-Dictionary* Catholic Press (Ranchi)

佐々木明 1981a「Dhādēkī-Sālhapūr ——北インド農村の社会と生活(1)——」信州大学人文学部『人文科学論集』XV pp. 55-65

佐々木明 1981b「ダーデキー・サールハープールの宗教生活(1)」『民族学研究』 XLV pp. 293-307

佐々木明 1981c「ダーデキー・サールハープールの宗教生活(2)」『民族学研究』XLVI pp. 18-34

Sharma, Satya P. 1973 "Marriage, Family and Kinship among the Jats and the Thakurs of North India : Some Comparison" *Contributions to Indian Sociology* VII pp. 81–103

Singh, Y.P. and Udai Pareek 1966 "Socio-Economic Characteristics of Key Communicators" *Sociological Bulletin* XV pp. 52–60

Srinivas, M.N. 1965 "Social Structure" in *The Gazetteer of India* (Governmant of India)

Vatuk, Silvia 1969 "A Structural Analysis of the Hindu Kinship Terminology" *Contributions to Indian Socilology* III pp. 94–115

Vatuk, Silvia 1972 "Kinship Terminology in Northern India" *American Anthropologist* LXXIV pp. 791–793